

草丈長く、葉色は平年並み ～追肥判断は慎重に～

7月 日	上旬		中旬		下旬	
	1	5	10	15	20	25
生育	最高分げつ期 10 葉期		幼穂形成期 11 葉期		減数分裂期 12 葉期	
水管理	中干し		間断かん水		湛水管理：カドミウム吸収抑制対策	
	湛水管理は8月下旬まで					
	低温時は深水管理					
作業	畦畔草刈り ～ 斑点米カメムシ対策 ～ 草刈禁止期間※					
	※9月上旬まで。ただし出穂期10日後頃の薬剤散布後7日以内に一度草刈りを実施する。					
	葉いもちが発生した場合					
	ブラシン剤かノンプラス剤を散布		ビーム剤の追加防除		穂いもち防除を実施する場合 コラトップ粒剤5を散布	

1 7月15日現在の生育状況

○7月15日現在の生育は、草丈は平年比111%と長く、茎数は平年比79%と少なく、葉数は平年差+0.5葉と多い状況です。

表1 水稲定点調査結果(農業振興普及課)

	草丈 (cm)	茎数 (本/m ²)	葉数 (葉)	葉色 (SPAD)
本年	67.3	471	11.5	42.1
平年値	60.8	598	11.0	42.0
平年比	111%	79%	+0.5	100%

○また、葉色は7月5日調査時から低下しているものの、15日現在は42.1と平年並みに推移しています。

品種：あきたこまち、管内5カ所平均

○本年は、ほ場により生育の差が大きい状況です。追肥を行う場合は、幼穂形成期の生育・栄養診断に基づき、ほ場毎の生育に合わせて慎重に追肥を判断しましょう。

2 水管理 ～カドミ対策の湛水期間は7/15～8/25が目安～

○カドミウム吸収抑制対策として、出穂前後各3週間の7月15日頃から8月25日頃まで湛水管理を徹底してください。

3 追肥 ～ 幼穂形成期の生育・栄養診断を実施しましょう ～

表2 幼穂形成期の生育による追肥の診断(暫定案)

生育型		生育過剰	理想的な生育	生育不足
草丈 (cm)		65 cm以上	60～65 cm	60 cm以下
葉色 (SPAD502) (葉色板)		42以上 (5.5以上)	39～42 (4.5～5.5)	39以下 (4.5以下)

追肥 (N成分)	幼穂 形成期	なし	ムラ直し1 kg/10a	1～2 kg/10a
	減数 分裂期	なし	1～2 kg/10a	1～2 kg/10a

注) あきたこまち、目標収量 570kg/10a

幼穂形成期(幼穂2mm、7月15日頃)の極端な葉色低下は、1穂粒数の減少・有効茎歩合の低下を招きます。幼穂を確認し、表2を参考に生育・栄養診断を実施して下さい。

- 幼穂形成期に草丈65cm以上で葉色が濃い場合は、穂肥は控えます。
- 幼穂形成期に草丈60～65cmで、葉色が低下している場合は、減数分裂期(葉耳間長±0cm、7月25日頃)主体の追肥を実施します。
- 幼穂形成期に草丈60cm以下で、葉色が低下している場合は幼穂形成期(7月15日頃)と減数分裂期(7月25日頃)の追肥を実施します。
- 一発型の肥料を施用した場合は、基本的には追肥は控えるようにします。
- 幼穂形成期の時点で、表2の基準より、草丈がかなり長く、葉色が濃いことで倒伏が懸念される場合は、やむを得ぬ緊急手段として倒伏軽減剤(表3)の使用を検討してください。

表3 倒伏軽減剤の一例

薬剤名	使用量(/10a)	使用時期	使用上の注意
スマレクト粒剤	2～3kg	出穂20日～7日前	湛水状態で施用し、散布後7日間は止水する。
ビビフル粉剤DL	3～4kg	出穂10日～5日前	稲の茎葉部に、均一に散布する。

4 病虫害防除 ～ 畦畔等の草刈りを徹底して斑点米カメムシを抑制～

①いもち病

- ほ場の見回りにより早期発見に努め、病斑を発見したら直ちに予防剤と治療剤の混合剤(ブラシン、ノンブラス)を散布して下さい。
- 葉いもちが多発しているほ場では、出穂15～7日前にコラトップ粒剤またはゴウケツ粒剤(サンブラス粒剤)を散布するか、出穂直前にビーム剤(またはトライフロアブル)と穂揃期にラブサイド剤(またはトライフロアブル)で茎葉散布を行います。

②斑点米カメムシ

- 畦畔や農道等の草刈りは、出穂10日前までに徹底しイネ科雑草の除去に努めます。
- 水田内にホタルイ等のカヤツリグサ科雑草やノビエの残草があると、アカスジカスミカメの侵入を助長するので、水田内の雑草対策を徹底しましょう。

◎ご質問は、JAかつの営農経済部(23-2497)か鹿角地域振興局農業振興普及課(23-3683)まで